

異文化探求の授業におけるグループ発表を自己評価する —振り返りによる学びの構築をめざして—

稲葉みどり

愛知教育大学日本語教育講座

Self-assessment of the Students' Performance in Group Presentation in Class

Midori INABA

Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要 約

本研究では、筆者が実践した「異文化探求」の授業で取り入れたグループ発表についての学生の意識や学習成果等に関する考察を行った。発表（プレゼンテーション）という形態の活動は、体験的な学習、アクティブ・ラーニングや協同学習の理念を背景とした授業、教室活動以外にも、教育や学習の様々な場面で取り入れられており、学生が身につけるべき大切なアカデミック・スキルの一つであると考えられる。一方で、発表をすることに対して、不安、心配、苦手意識等を抱く学生もいるのではないと思われる。そこで、本研究では、当該の授業の中心の課題である作品発表に関わる学生の心理や感情、発表の仕方・態度、作品の出来上がり、探求目標の達成度、異文化理解の促進等について学生の自己評価を基に分析した。その結果、作品発表については、不安や心配等があったが、グループ発表ということと安心感を持って臨んだ学生が多いことが分かった。しかし、当該の発表で自信が高まったと考える学生は少なかった。発表方法・態度等については、役割分担やメンバーの平等参加等については達成されたが、パソコンやパワーポイント等を使用した発表技術においては、十分とは言えないと捉える学生が多いことが分かった。作品については、探求の目標はほぼ達成され、作品のできあがりについても学生の自己評価は比較的高かった。しかし、聴衆を意識して、より魅力的な作品にするレベルには至ってなかったと捉える傾向が見られた。探求活動や作品の制作等を通じて、異文化理解が促進されたと考える学生の割合は高かった。そして、別のグループの作品発表を聞くことで様々な情報に触れることができ、異文化について学ぶさらなる機会となったことが明らかになった。しかし、これらは学生の自己評価を通じた考察であり、今後は客観的な基準等を用いて、その成果や課題を詳しく追究する必要がある。

Keywords : プレゼンテーション, 発表技術, グループ学習, 自己評価, 異文化理解

I 研究の動機と研究課題

1.1 研究の動機

本研究では、筆者が実践した「異文化探求」の授業で取り入れたグループ発表に関する学生の意識や学習成果等に関する考察を行う。

発表（プレゼンテーション）¹という形態の活動は、体験的な学習、アクティブ・ラーニングや協同学習の理念を背景とした授業や教室活動以外にも、教育や学習の様々な場面で取り入れられている。

一般的には、発表を行うのは、学習者が何かを調べたり、分析したり、考察したことをまとめ、他の人に分かりやすく伝えるという活動である。発表は、説明、説得、報告、提案、原因・結果、比較・対象、情報共有等の様々な目的で行われ、目的によって、そのスタ

イルも異なる。現代社会では、様々な場面で発表をすることが多いので、これは学生が身につけるべき大切なアカデミック・スキルの一つであると考えられる。

一方、学生（学習者）の立場から考えると、発表をすることに対して、不安、心配、苦手意識等を抱く学生もいるのではないと思われる。

中学校の教師と生徒を対象とした英語の授業における学習形態に関する調査研究（稲葉, 2016）では、発表という形態の学習は、教師の好ましいと考える学習形態ではあるが、中学生には、あまり好まれていないことが明らかになった。

当該の授業は、多文化リテラシーの育成をめざした教養科目の1つで、探求活動をグループで行い、結果を作品²にまとめ、発表することを主眼としたものである。発表は、パワーポイントを使ってスライドを作

成し、聴衆に分かりやすく紹介するというものである。

当該の授業の受講学生に大学に入ってから授業においてパワーポイントを用いたプレゼンテーションをしたことがあるかを調査した結果、経験がほとんどないことが分かった（稲葉，2018）。

そこで、本研究では、授業の課題である作品の発表に関わる学生の心理や感情、発表の技術・態度と作品の自己評価、探求目標の達成度、異文化理解の促進等について、学生への意識調査と自己評価の結果を基に考察する。

1.2 研究課題

本研究では、異文化探求の授業に参加した学生（以下、学生）について、以下の点を考察することを研究課題とする。

まず、発表することに対してどのような意識を持っていたかを探る。1) 発表前に、不安・心配等があったか、或いは、自信・得意意識等を持っていたか、2) 発表後、自信はついたか、或いは、苦手意識をもったか等に着目する。

次に、3) 発表の方法や技術、発表態度や姿勢等について、どのように自己評価しているかを探る。自己評価は、発表の経験の浅い初心者であることを勘案して、ごく基本的で初歩的な項目を提示した。

さらに、4) 作品（内容）のできあがり具合についてどのように捉えているかを探る。探求の目的は達成されたか、聴衆が興味をもつ内容に仕上がったか等に関して、項目を設け各自で評価した。5) 作品の制作を通じて、異文化理解が促進されたかどうかに関しても、探求の目的の一部と捉え、設問に含めた。

II 関連研究

ここでは、当該の授業を対象とした筆者の関連研究を概観し、本研究の位置づけを行う。

稲葉（2018）では、この授業（探求活動）において、学生が問題解決力、論理的思考力等のアカデミック・スキルをどの程度用いることができたかを考察した。その結果、①探求課題と背景を明確にして取り組むこと、②主張と結論を明確に提示すること、③主張の根拠となる事実やデータを提示するという基本的な取り組みはできたことが分かった。一方で、④対立意見を上げ、論駁、検討することに関しては、あまり達成されていないことが示唆された。

稲葉（2019a）では、①グループ活動に対する不安と意識の変容、②参加の平等性の担保³、③対人関係スキルの使用、④活動で遭遇した問題について考察した。その結果、①グループ活動に対する不安と意識の

変容については、始めは不安・緊張・ぎこちなさはあったが、次第に打ち解け、仲間意識も湧き、成功や達成感を共有できたこと、②参加の平等性の担保に関しては、十分に担保されたとは言えなかったこと、③対人関係スキルに関しては、学生のスキルの不足が示唆されたこと、④活動で遭遇した問題については、協力的でない人の存在、作品の整合性の欠如等が明らかになった。

稲葉（2019b）では、相互交流の質とそれを促進する要因に着目し、活動の過程でどのような行動をしたかを自己評価の形態で調査した。特に、「肯定的相互依存」、「積極的相互交流」、「個人の2つの責任」、「社会的スキルの促進」、「活動の振り返り」の観点⁴から、学生のグループ活動への取り組みを考察した。その結果、①「積極的相互交流」は頻繁に行われたが、「教え合う」、「意見調整する」、「励まし合う」という学習者間の相互交流については積極性が低かったこと、②学生間の「肯定的相互依存」は確認されたが、各自の持つ力を最大限に出し合うまでは至らなかったこと、③「自分の学びに対する責任」は果たせたが、「支援」、「埋め合わせ」、「代行」等、「仲間の学びに対する責任」に関してはあまり行動できなかったこと、④「社会的スキル」の使用は限られており、対人関係に関わるスキルの使用は少なかったこと、⑤活動の省察は十分に行えたとは言えなかったこと等が明らかになった。

そこで、本研究では、この授業の課題である作品の発表という学習活動について焦点を絞り、発表形態の学習活動への意識と実際の発表活動の自己評価、制作した発表作品の自己評価や目標達成度、発表後の意識の変容等に着目して考察を進めることにする。そして、研究から得られた知見を、今後の授業実践や教師の指導や介入の方法の検討に役立てることが目的である。

III 研究の方法

3.1 「異文化探求」の授業の概要

授業は、協同学習の理念を援用したグループ活動で、活動の母体となるグループは、できる限りコース・選修・専攻の異なる4名を1グループとし、教師が決定した。以下は授業の構成である。

- ① イントロダクション：異文化への興味・関心を高め、授業の概要、グループ分けを行う。
- ② 探求課題の設定：グループ毎に探求テーマを決定し、内容を報告書にまとめる。
- ③ 探求計画の作成：探求内容をより具体化し、情報収集の方法等を検討する。
- ④ 課題探求の遂行：授業内外で探求を進める。役割分担等を行う。活動後に報告書を作成する。

- ⑤ 探求結果の発表：結果をプレゼンテーション作品にまとめて発表する。ピア・フィードバックを行う。
- ⑥ 探求活動のまとめ：フィードバックを参考に、内容を精緻化し、探求レポートにまとめる。
- ⑦ 探求活動の省察：活動全体を振り返り、探求への取り組み、グループ活動、プレゼンテーション、探求目標の達成度等の自己評価を行う。省察内容をレポートにまとめる。

作品発表には、1 グループ 15 分の発表と 10 分間の質疑応答の時間が与えられた。発表の方法は各グループに任された。発表者は、発表概要を書いたハンドアウト 1 枚を作成して聴衆（発表外の学生）に配布した。質疑・応答の際の司会は発表グループのメンバーで行った。聴衆は、発表者（グループ）に対して、フィードバック・シートにコメントを書き、後日教員（研究者）が発表者に渡した。

3.2 被験者と学習経験

この授業は、稲葉（2018, 2019a, 2019b）と共通の授業である。授業の目標は、多文化リテラシーや情報リテラシー等の向上、論理的思考力、問題解決力、創造的思考力、コミュニケーション・スキル等のアカデミック・スキルの醸成を目標とし、グループによる探求活動を通じて、課題を達成することを学習目標とする。そして、授業の総括として、学生は、探求活動の振り返り（省察）を行い、課題遂行の過程の様々な取り組みや目標の達成度等を自己評価した。

授業の内容や構成は、異文化探求の授業は、90 分 15 回の大学 2 年生を対象とした教養教育の科目で、学生は、現代学芸課程国際文化コース（30 名）、同造形文化コース（4 名）、同情報科学コース（1 名）、教員養成課程保健体育選修・専攻（14 名）、同英語選修・専攻（3 名）、同社会選修（1 名）、総計 53 名で、本研究の対象となったのは 2 名の中途辞退者を除く 51 名である。

これらの学生がどのような学習背景を持つかについては、大学に入ってから発表形態の学習経験の有無、グループ学習の経験、異文化コミュニケーションの経験の有無等について調査し、結果は、稲葉（2018）で提示している。それによると、大学の授業で発表の経験はあるが、パワーポイント等を用いたプレゼンテーションの経験はほとんどないか数回以内の受講生が大半であるという結果になっている。

3.3 研究資料

調査資料は、探求活動後の振り返りで実施した学生の自己評価である。自己評価の項目は、グループ活動に関わりが深い設問で構成されている。本研究では、

この中から発表活動に関わる 27 項目の設問の回答を分析の対象とする。尚、この自己評価は、探求活動の省察の一環として実施した。学生には、きちんと振り返りをすることが目的で、回答内容は成績には関係しないことを設問紙に記すと同時に口頭でも伝えた。

IV 結果と考察

4.1 作品発表前の意識の分析

最初に、グループで作品発表を行うことについて、学生がどのように感じていたかを明らかにする。ここでは、発表への不安や心配はあったか、自信の有無、得意・苦手意識等を調査した。【表－1】は、作品発表に関する 7 項目の設問である。（ ）内は、略称である。設問 1～3 は不安、羞恥、心配などマイナスの感情に関わること、設問 7 は安心感、設問 8～10 は発表への自己効力感等、プラスの感情に関わる内容である。振り返りの際に実施した質問のため、設問文は一部過去形の表現を用いている。

【表－1】作品発表への不安・自信に関する設問

	設 問（ ）内は略称
1	発表には不安があった。（不安）
2	発表は恥ずかしかった。（羞恥）
3	質疑・応答が心配だった。（心配）
4	グループ発表なので安心だった。（安心）
5	発表は得意なほうである。（得意）
6	発表には自信があった。（自信）
7	発表するのは好きである。（好き）

設問に対する回答は、「①全然そう思わない」「②あまりそう思わない」「③どちらとも言えない」「④少しそう思う」「⑤強くそう思う」の 5 つから 1 つ選択する形式を用いた。

結果は、回答①には 1 点、②には 2 点、③には 3 点、④には 4 点、⑤には 5 点を与え、平均値を算出した。平均値が 1.0 に近づくほど否定的（「当てはまらない」）度合いが高いことを表し、平均値が 5.0 に近づくほど肯定的（「当てはまる」）度合いが高いことを表す。3.0 は、その中立点である。

【図－1】は、設問 1～7 の結果を平均値の高い方から順に並べてグラフにしたものである。

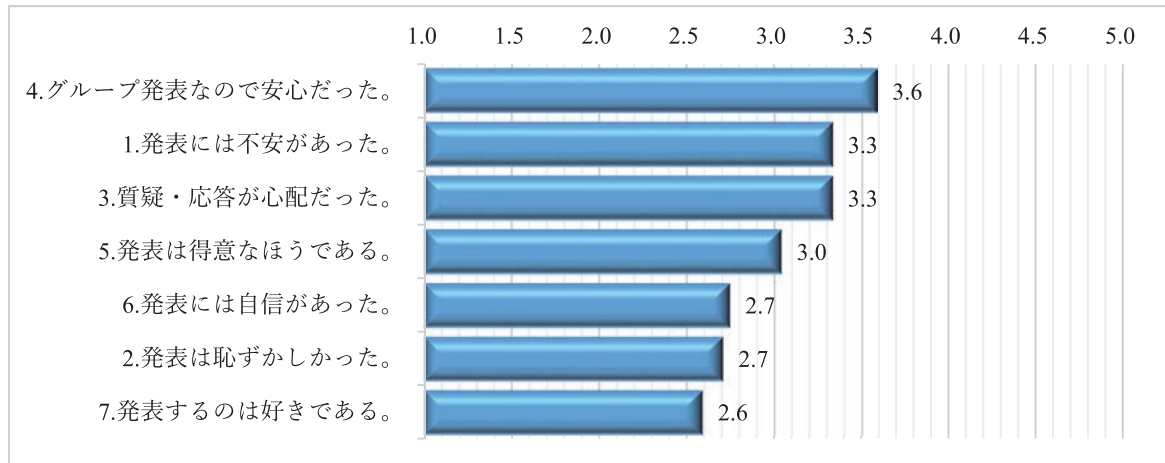
まず、作品発表に対して、学生に不安があったかどうかを見る。設問 1 「不安」は、平均値 3.3 で、肯定的ではあるので、ある程度不安があったといえる。

設問 3 「心配」は、同じく平均値 3.3 である。よって、質疑・応答に対してもある程度心配があったと考えられる。設問 2 「羞恥」は、2.7 で、低い。よって、それほど恥ずかしいとは感じてなかったようである。

次に、発表に対してプラスの面の感情である得意、自信、好み等を見る。設問 5「得意」は、平均値 3.0 で、どちらとも言えないという結果である。設問 6「自信」は、平均値 2.7 で、自信がない方に寄っている。設問 7「好き」は、平均値 2.6 で、さらに低く、好きとは言えないことを示している。これらの学生にとって発表は特に得意であると考える学生よって、は

少なく、それほど好みの学習形態でもないようである。

設問 4「安心」の平均値は 3.6 で、これらの設問の中では一番高い。作品発表にはあまり自信がなく、多少の不安や心配があったといえるが、グループでの発表ということで、心配や不安は軽減されたと考えられる。



【図－1】発表前の意識に関する設問への回答（平均値）

4.2 作品発表の自己評価と発表後の所感

次に作品発表後、学生がどのように感じたかを分析する。【表－2】は、発表後の所感に関する 5 項目の設問である。（ ）内は、略称である。設問 8、9 は、発表の成功に関すること、設問 10 は、発表をして自信がついたかどうか、設問 11 は、苦手意識に関すること、設問 12 は、後悔に関することである。

【表－2】発表後の所感に関する設問

	設 問（ ）内は略称
8	発表はうまくいったと思う。（成功）
9	発表して自信がついた。（自信獲得）
10	仲間のおかげでうまくいった。（仲間）
11	発表は苦手だと思った。（苦手）
12	もっと練習すればよかった。（練習）

設問への回答の方法は、「①全然そう思わない」「②あまりそう思わない」「③どちらとも言えない」「④少しそう思う」「⑤強くそう思う」の 5 つから 1 つ選択する形式、平均値の算出方法は、4.1、4.2 と同

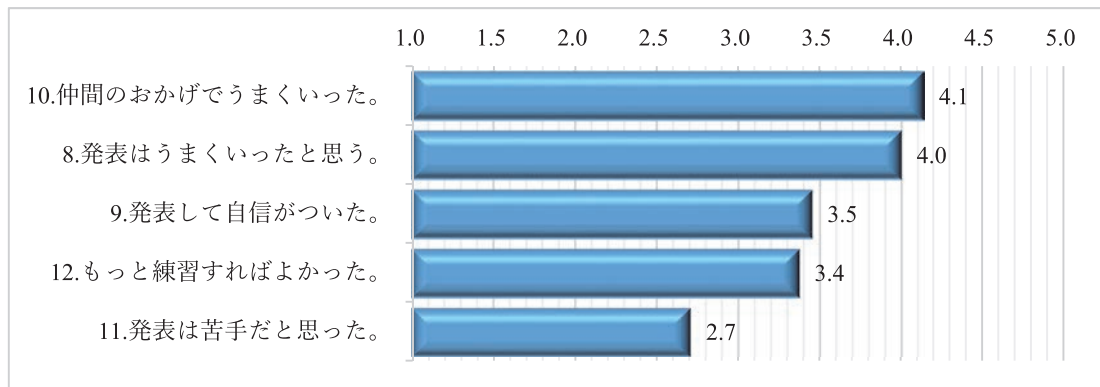
じである。

【図－2】は、設問 8～12 の結果を平均値の高い方から順に並べてグラフにしたものである。結果を見ると、発表の成功に関する設問 10「仲間」は、平均値 4.1 で、これらの項目内で一番高い。設問 8「成功」は、平均値 4.0 で、これも 4.0 を超えている。よって、多くの学生は発表が成功したと考えていると言える。

発表後に自信がついたかどうかに関しては、設問 9「自信獲得」の平均値 3.5 を見る限り自信がついたと考える割合は低い。

設問 12「練習」は、平均値 3.4 で、事前にもっと練習すればよかったと後悔した学生もいたことが分かる。一方で、設問 11「苦手」は、平均値 2.7 と肯定の度合いは低く、苦手意識はそれほど強くないことが分かる。

以上から、学生は、作品発表は概ね成功したと考えているが、それにより自信がついたとはあまり考えていない。これらの学生の多くは、パワーポイント等を用いたプレゼンテーションの経験をほとんど持たないが、1 回だけの経験では、自信獲得にまでには至らなかったのではないかと考える。これは、設問 12「練習」で、事前練習の必要性を感じた学生がいることとも通じる結果である。



【図-2】発表後の意識に関する設問への回答（平均値）

4.3 作品発表の方法・態度の自己評価

ここでは、発表方法・発表態度に関して、学生がどのように自己評価をしているかを考察する。【表-3】は、作品発表の方法等に関する 10 項目の設問である。

() 内は、略称である。設問 13 は、発表時の所作に関する事、設問 14、22 は、発表時の言葉に関する事、設問 15、17 は、パソコン操作等の技術的なこと、設問 16 は、タイムマネジメントに関する事、設問 18、19 は、聴衆とのインタラクションに関する事、設問 20、21 は、参加の平等性に関する事である。

回答は、「①とても低い／5 段階評価の 1」「②少し低い／5 段階評価の 2」「③ふつう／5 段階評価の 3」「④少し高い／5 段階評価の 4」「⑤とても高い／5 段階評価の 5」の 5 つから選択する形式を用いた。集計の方法は、4.1～4.3 と同じである。

【表-3】作品発表の方法・発表態度に関する設問

	設 問 () 内は略称
13	発表時の立ち位置、発表姿勢等は適切だったか。(姿勢)
14	声の大きさ、話す速さ等は適切だったか。(話し方)
15	パソコンやパワーポイントはうまく操作できたか。(パソコン操作)
16	時間配分は適切であったか。(時間配分)
17	スライドは見やすく、分かりやすい構成だったか。(スライド構成)
18	聴衆を引き込むことができたか。(聴衆)
19	質疑・応答はうまくできたか。(質疑)
20	発表時の役割分担は適切だったか。(役割分担)
21	メンバー全員が偏りなく発表に参加したか。(平等発表)
22	発表時の言葉使いや表現は適切だったか。(言葉遣い)

【図-3】は、設問 13～22 の結果を平均値の高い方から順に並べてグラフにしたものである。平均値の高い方から順に結果を見ると、設問 21「平等発表」は、平均値 4.4 で、これらの項目の中で一番高い。設問 20「役割」は、平均値 4.1 で、これも高い。よって、自己評価によれば、これらの項目の達成度は高いと言える。この要因として、学生がグループ内で担当を決め、適切に分担し、全員が発表する機会があるように計画したこと等が考えられる。実際に全ての発表では、グループのメンバー全員に話す機会が設けられていたので、納得のできる数値と言える。

設問 22「言葉使い」は、平均値 3.9 で、それほど低くはないが、設問 14「話し方」は、平均値 3.6 で、やや低い。よって、発表時の言葉に関しては、やや達成度が低いと考えられる。

設問 17「スライド構成」は、平均値 3.7、設問 16「時間配分」は、平均値 3.7、設問 15「パソコン操作」は、平均値 3.5 で、達成度は中程度である。これは、プレゼンテーションの経験が浅いことから、予想できる結果である。

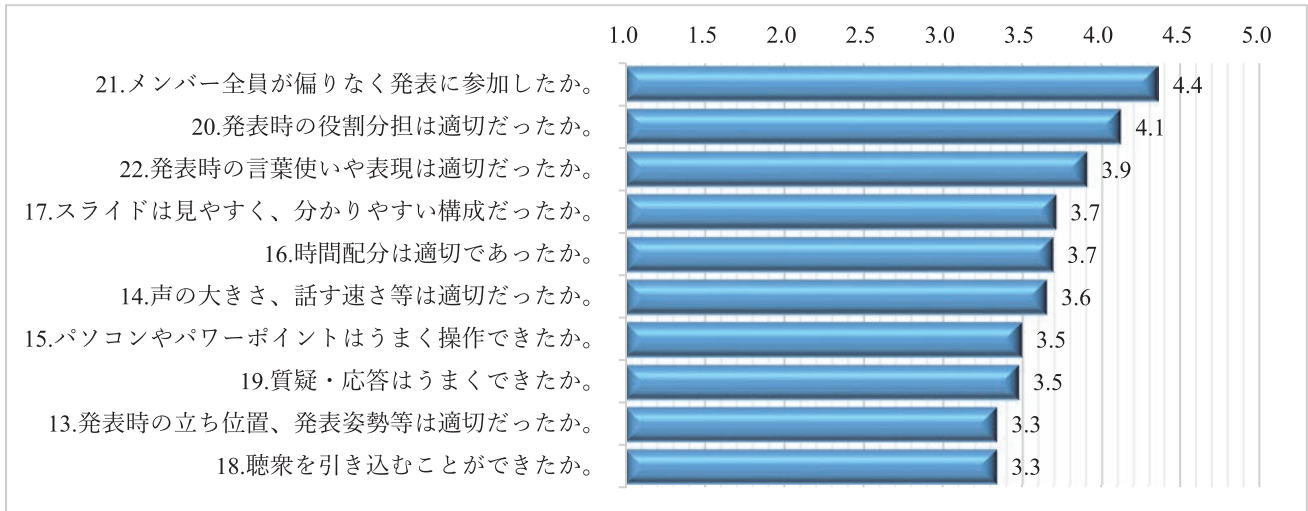
発表後の質疑・応答は、聴衆との大切なインタラクションの機会である。しかし、結果を見ると、設問 19「質疑」は、平均値 3.5 で、それほど高くない。よって、質疑・応答については、それほどうまくできたと考えていない学生が多い。実際に質問にスムーズに答えられない場面が多く見られた。その場でスマートフォンを使って調べて答える発表者もあり、質疑・応答の仕方としては、あまり望ましくない姿も見受けられた。あらかじめ質問を予測し、追加情報のスライドを準備しているようなグループをあったが、準備不足のグループもあった。

設問 18「聴衆」は、平均値 3.3 で、聴衆を意識し、引き込めるようなプレゼンテーションを行うという意味では、達成度が低いと評価している。

最後に、設問 13「姿勢」は、平均値 3.3 で、一番低

い。発表においては、どのグループも話し手の立つ位置がスライドの端の方で、棒立ちの状態で話したグループがほとんどであった。教室の制約もあるが、最初のグループがそのように発表したので、次のグループもそのようにやったのかもしれない。しかし、話し手とそれ以外のグループのメンバーが発表の中でどのような役割でどの位置に立つかが大切であるので、この点は学生に考えさせていく必要がある。

以上、発表方法・態度等については、発表での役割分担やメンバーの平等参加等は達成されたと捉えられるが、発表技術においては、十分に達成されとは言えない。質疑・応答等の聴衆とのインタラクションを含め、聴衆と引き込むようなプレゼンテーションをすること、また、立ち位置・姿勢等を考えて、効果的なプレゼンテーションをすること等が課題であることが明らかになった。



【図-3】発表の自己評価に関する設問への回答（平均値）

4.4 作品の自己評価と異文化理解の醸成

最後に、自分たちの発表作品、および、探求活動を通じた学びについて、学生がどのように自己評価をしているかを考察する。

【表-4】は、作品内容の自己評価に関する5項目の設問である。（ ）内は、略称である。設問23は、作品の内容に関する事、設問24は、探求の目標達成に関する事、設問25は、作品のできばえに関する事、設問26、27は、異文化理解に関する内容である。回答、集計の方法は、4.3と同じである。

【図-4】は、設問23～27の結果を平均値の高い方から順に並べてグラフにしたものである。自己評価が一番高いのは、設問26「異文化理解」の平均値4.6、および、設問27「別の作品」の平均値4.6である。よって、探求、作品の制作等を通じて、異文化理解が促進されたと言えよう。また、作品発表を聞くことで、別のグループの作品からも異文化に関する情報が提供され、学ぶ機会を得たと言える。

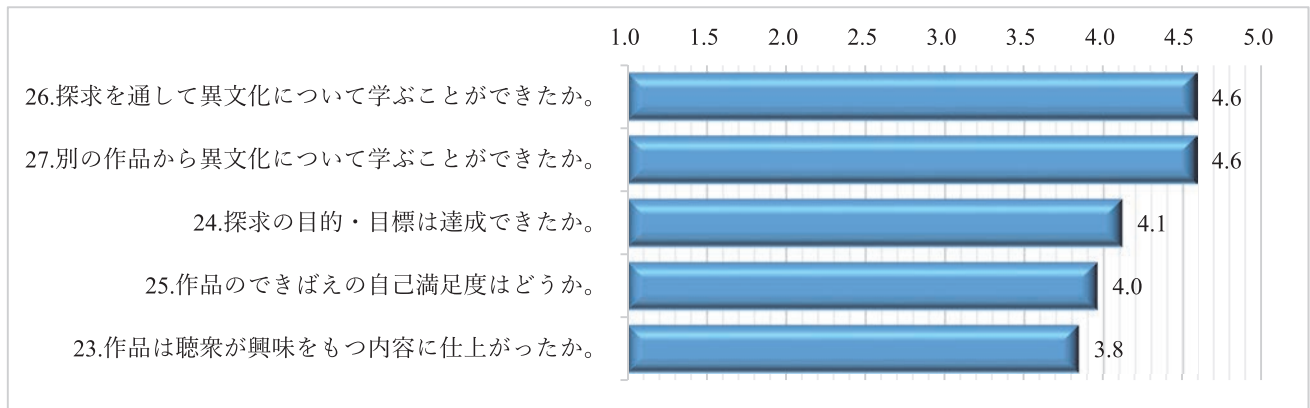
次に、平均値が高いのは、設問24「目標達成」の平均値4.1で、探求の目標はほぼ達成されたと考えられる。また、設問25「できばえ」は、平均値4.0で、作品のできあがりについても、自己評価は比較的高い。

しかし、聴衆を意識して、より魅力的な作品を制作することができたかどうかについては、設問23「作

品内容」の平均値3.8という結果を見ると、自己評価がこれらの中で一番低いという結果となった。これらの結果はあくまで自己評価で、学生が少し高めに評価していることも考えられるので、これらの数値を鵜呑みにすることはできない。また、学生自身の評価基準がどの程度のものかも曖昧である。より高いものを知っている学生やそれをめざす学生は、評価が辛くなることも考えられる。あくまで、ここで提示された数値は、経験の浅い大学2年生のもつ評価基準から提示された結果である。

【表-4】作品の自己評価と異文化理解に関する設問

設問	()内は略称
23	作品は聴衆が興味をもつ内容に仕上がったか。(作品内容)
24	探求の目的・目標は達成できたか。(目標達成)
25	作品のできばえの自己満足度はどうか。(できばえ)
26	探求を通して異文化について学ぶことができたか。(異文化理解)
27	別の作品から異文化について学ぶことができたか。(別の作品)



【図-4】発表作品の自己評価に関する設問への回答（平均値）

V 結論と課題

本研究では、異文化探求の授業の中心の課題である作品発表に関わる学生の心理や感情、発表の仕方・態度、作品の仕上がり、探求目標の達成度、異文化理解の促進等について学生の自己評価を基に分析した。その結果、以下のようなことが明らかになった。

作品発表については、発表に自信を持っている学生は少なく、発表に対する不安や質疑・応答への心配等があることが分かった。これは、発表経験の浅い学生には無理もないことである。しかし、グループでの発表ということで、心配や不安はかなり軽減され、安心感もあったことが分かった。以上から、発表を行う場合、初心者には個人よりもグループ発表の形で授業に導入することも有用であると考えられる。

作品発表については、概ね成功したと捉えているが、それにより発表することへの自信が高まったと考える学生は少ない。一回だけの発表で、特段自信が高まることは予想しにくいので、発表の機会を増やしていくことが大切である。

発表後の所感としては、苦手意識を持った学生は少なく、事前の練習の必要性を感じた学生が見られた。これは、学生が発表に慣れていけば、だんだん上手になることを意識したからではないかと思われる。

発表方法・態度等の自己評価については、発表での役割分担やメンバーの平等参加等は、概ね達成されたととらえている。しかし、これは学生自身の主観的な評価基準に基づくものであり、めざすレベルが低く、少し甘く評価した可能性も考えられるので、今後は客観的な基準も導入する必要がある。

パソコンやパワーポイント等を使用した発表技術においては、十分に達成されたと考えていない。やはり技術的な面をさらに高めていく必要がある。

発表でのパフォーマンスについては、立ち位置・

姿勢等を考えて、効果的なプレゼンテーションをすることが十分にできなかったと言える。よって、これらの点を授業等で取り上げて練習することが新たな目標となった。また、質疑・応答等や聴衆とのインタラクションを上手にすること、聴衆と引き込むようなプレゼンテーションがどうやったらできるかを考えさせることも課題である。

作品の自己評価については、探求の目標はほぼ達成され、作品の出来上がりについても自己評価は比較的高かった。しかし、聴衆を意識して、より魅力的な作品にするレベルには至ってなかったと考える傾向が見られた。

最後に、異文化探求や作品の制作等を通じて、異文化理解が促進されたと考える学生の割合は高かった。さらに、別のグループの作品発表を聞き、様々な情報に触れることも異文化について学ぶ機会となったことも明らかになった。この点では、当該の授業の目標がほぼ達成できたと考えている。

今後は、本実践から提示された様々な課題を克服すべく、授業での新たな取り組みをしていきたいと考えている。

注

¹ 本研究では、「発表」という用語をプレゼンテーションと同義で用いることにする。

² ここでは、学生が制作したスライドを「作品」と考え、そのプレゼンテーションを「作品発表」と呼ぶことにする。

³ Kagan (1994) は、学習仲間が同じ程度、学び合いの活動に参加している状態を担保する「参加の平等性の担保」を提案している。

⁴ Johnson et al. (2002) は、協同学習において、グループ活動を支える基本的要素として、「積極的相互交流」「肯定的相互依存」、「個人の 2 つの責

任」、「社会的スキルの促進」、「活動の振り返り」の5つを掲げている。

参考文献

- 稲葉みどり(2016).「英語の教室活動に対する中学生の本音－英語嫌いにしないためのヒント」『教科開発学論集』4, 57-68.
- 稲葉みどり(2018).「第4章 活動型授業で学びを拓く－異文化探求によるアカデミック・スキルの醸成」『教科開発学を創る－第2集』愛知教育大学大学院協同教科開発学専攻編, 58－80.
- 稲葉みどり(2019a).「グループ活動における相互交流の過程の分析－参加態度・平等性の担保・対人関係スキル」『愛知教育大学研究報告－人文科学編』68.
- 稲葉みどり(2019b).「グループ活動による学びの省察－積極的相互交流・肯定的相互依存・個人の2つの責任」『教科開発学論集』7.
- Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Holubec, E. J. (2002). *Circles of learning: Cooperation in the classroom* (5th Ed.). Edina, MN: Interaction Book Company.
- Kagan, S. (1994). *Cooperative Learning*. San Clemente, California: Kagan Publishing.